

しんたわらいぜき
新田原井堰

しんたわらいぜき わけちょう うがん さえきちょうあまがせ さがん
新田原井堰は、和気町田原上(右岸)、佐伯町天瀬(左岸)
よしいがわ せとちょう くまやまちょう わけちょう はたけ
の吉井川にあり、瀬戸町、熊山町、和気町の田んぼや畑
はこ じゅうよう と
まで用水を運ぶための重要な水の取り入れ口です。



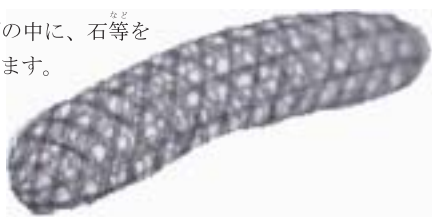
たわらいぜき 田原井堰、 たわら けんせつ 田原用水の建設



1985年まで使われていた田原井堰

(注) じゃかご

竹等で編んだかごの中に、石等を詰めたものをいいます。



(注) 堰 (せき)

川から水を取り入れるために、川の流れをせきとめるしきりのことをいいます。

(注) 飢饉 (ききん)

作物が日照りなどで育たなくなり、食べ物が足りなくなること

田原井堰は、新田原井堰が造られるまで300年近くも下流の田んぼや畑を養っていくこととなります。

江戸時代の初めごろ、備前岡山藩では日照りの度に農業用水が不足し、こまっていました。

そのため、田んぼや畑に用水を送るために、(注) じゃかごで堰が造られ、熊山町まで用水が引かれていました。

しかし、その堰は洪水の度に(注) に流され、その度に飢饉が起こり農民のくらしはそれほど豊かではありませんでした。

そこで、藩のお殿様は農民のくらしを守り藩を豊かにするために、何とかして田んぼを増やすことができないかと考え、洪水にも流されないように石を使って田原井堰を造りました。



石で造られた田原井堰

田原井堰は、流れる水の力がかかりにくいようにななめに長く、洪水にも耐ることのできるよう考えて造られました。また、高瀬舟が通れるような仕組みや、洪水の時に砂や石を用水路に入りやすくする仕組みなども考えられていました。

堰から取り入れられた水を下流の田んぼや畑に送るために、造られたものが田原用水であり、田原井堰ができたころには瀬戸町まで造られ、今ある用水の原形ができあがりました。今のように大きな機械もなく、田原用水を延ばすのに大変な苦労があったといわれています。

昔の多くの人々の努力の末に、田原井堰、田原用水ができたことによって、日照りの年でも水不足でいねが実らないという心配がなくなり、田んぼが広がり、米の取れ高がととも増え、農民のくらしは豊かになりました。



田原用水（1980年頃）
田原上（和気町）から砂川（瀬戸町）まで、およそ18kmにわたって田んぼや畑に水を送っています。

新田原井堰と田原用水

ところが、昭和40年頃になると吉井川の水が、水道や工場などで利用されるようになり、日照りの時には用水が不足するようになりました。また、田原井堰、田原用水も造られてから長年が過ぎ古くなってきたため、洪水などによりこわれるところが多くなってきました。

このため、田原用水は昭和47年から改修が行われ、新田原井堰は、昭和54年から国の事業として8年間で造られました。この堰は、水を取り入れるだけではなく、水を貯める機能を持っているため、水を安定的に配ることができるようになりました。また、150年に一度起こるとされる大洪水にもこわれないようにコンクリートと鉄で丈夫に造られています。



新田原井堰

完成した新田原井堰は、県と吉井川土地改良区によって、また、田原用水は、田原用水管理組合によって大切に管理されています。

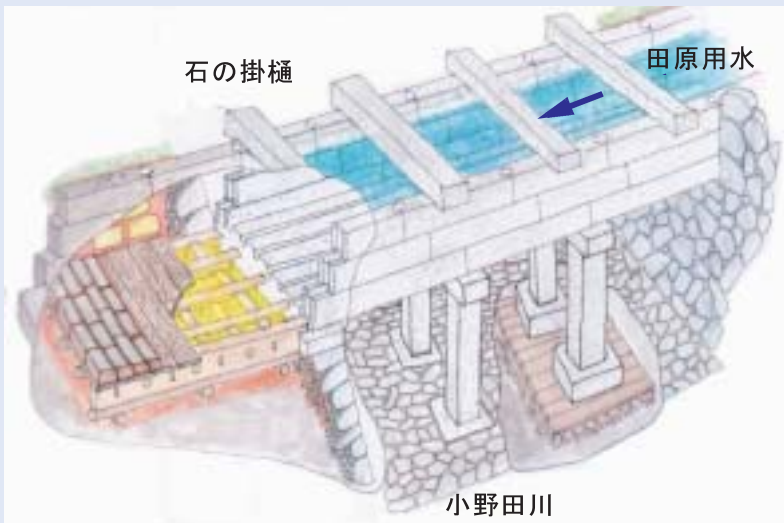


トピックス

用水路の工夫

石の掛樋

田原用水を小野田川の上に通すために造られた橋で、セメントがない時代に造られたため、水もれしないように細心の注意が払われ、歯車型に切った長さ4mもの石（花崗岩）を使って組み立てられています。1本の重さはおおよそ4トンあり、掛樋の長さはおおよそ13m、幅おおよそ3m、深さはおおよそ1mあります。



大阪から招いた石工たちにより、大変優れた技術を使って造られました。

国の田原用水改修工事の後に使われなくなりましたが、現在は、熊山町徳富に移設保存されており、平成5年4月23日に岡山県の重要文化財（建造物）に指定されました。



動かされる前の「石の掛樋」（1982年頃）
現在の田原用水は、小野田川の下を通っています。

ひやっけん いし とい 百間の石の樋

水を瀬戸町の万富や瀬戸に送るためには、どうしても熊山町徳富にある岩山を削って用水路を造らなければなりません。この部分は、「百間の石の樋」と呼ばれ、長さはおよそ150m、幅はおよそ3mありました。



樋が造られた時代には、石割に使う道具も発達しておらず、火薬も無かったため、岩の上で油を焚いて岩を割り、用水路を通したと言い伝えられています。

この樋は、平成5年4月23日に岡山県の史跡に指定されています。



「百間の石の樋」(1980年頃)



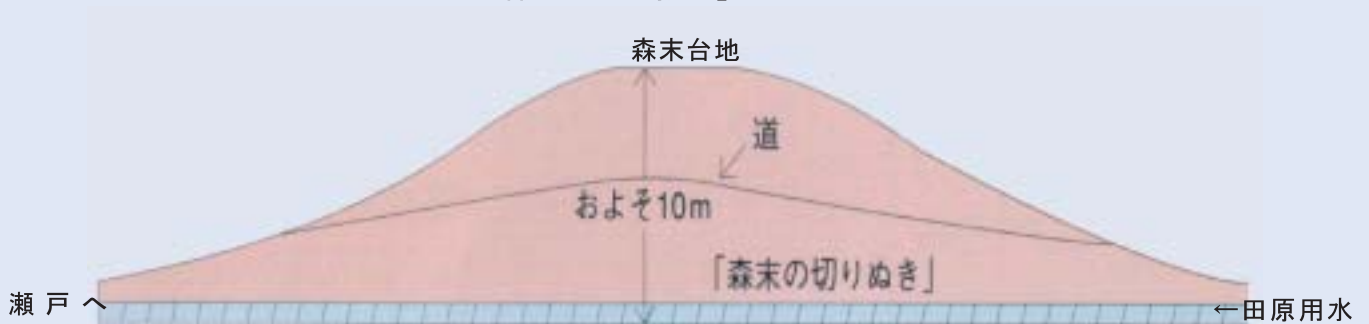
現在の「百間の石の樋」

もりすえ きぬ 森末の切り抜き

万富まで来た水を瀬戸せとに送るには、森末にある台地を通さなければなりませんでした。そこで、他より高くなっている土地を10mほど掘り下さげて、およそ400mの長い溝みぞを造り、用水をさらに延のばしました。この地域は粘板岩地域で崩れやすい所だったので、とても大変な工事で、3年余りの歳月さいげつを要しました。

この用水路は、森末の切り抜きと呼ばれ、平成5年4月23日に岡山県おかやまけんの史跡しせきに指定されています。

「森末の切り抜き」断面図



大雨の後の「森末の切り抜き」(1953年)



現在の「森末の切り抜き」

引用文献：「田原井堰民俗資料館の民族資料」、「吉井川水と農業」(中国四国農政局)、
「3・4年生社会科副読本 私たちの和気町」

(和気町小学校社会科副読本編集委員会)